2013 年 8 月 2 日（金）
第 3 回「人間の安全保障」読書会 於 東京大学駒場キャンパス
HSF 事務局長 佐野英志 headquarters@hsf.jp

【今回の１冊】 ハンナ・アレント（1994）
『人間の条件』 志水速雄訳（ちくま学芸文庫）

人間の安全保障と「人間の条件」

第１回、第２回と人間の安全保障が「何」を対象にした概念であり、「誰」の安全を保障する概念なのか概論から読み解いてきた。第３回となる今回は、人間の安全保障が含む「人間」とは何であるか、という根本的な疑問を哲学の知恵を借り考えていく。

・プロローグ

「私たちが行っていること」をテーマの中心に添え、労働(レイバー)・仕事(ワーク)・活動(アクション)という活動力の議論から人間の条件の最も基本的な要素を明確にすることを目的としている。

第１章　人間の条件

人間の条件とは、単に人間に生命が与えられる場合の条件を意味するだけでない。(p.21)

＜活動的生活(vita activa)＞

労働(レイバー)・仕事(ワーク)・活動(アクション)の三つの基本的な人間の活動力を指す。アレントは特に、労働と仕事を時間的な耐久性[1]によって分けて考え、活動を公共空間・社会の基盤になる活動力とした。

①**労働(レイバー)**→人間の肉体の生物学的過程に対応する活動力。

＊「労働は個体の生存だけでなく種の生命をも保障する（p.21)」活動力である。
＊「労働の人間的条件は生命それ自体である。(p.19)」

②**仕事(ワーク)**→人間生存の非自然性に対応する活動力。

＊「仕事は全ての自然環境とは異なる物「人工的」世界を作りだす。(p.19～20)」

＊「仕事の人間的条件は世界性(ワールドリネス)である。(p.２０)」

③**活動(アクション)**→ものあるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一の行動力。

＊人間の多数性に対応し、「出生という人間の条件に最も密接な関連を持つ。(p.21)」
＊活動は優れて政治的な活動力である（p.21)。

---

[1] アレントはギリシャ人の人間観を引き合いに、人間の条件に時間軸という概念を取り入れた。特に、本書 33 頁から 34 頁にかけて、ギリシャ人は人間を取り囲む自然と神々は不死であり可死性を持つ事がすなわち人間の条件であると、ギリシャ人の人間観を紹介し、動物と人間の違いを説明した。

2013 年 8 月 2 日（金）
第 3 回「人間の安全保障」読書会 於 東京大学駒場キャンパス
HSF 事務局長 佐野英志 headquarters@hsf.jp

・第２章　公的領域と私的領域

人間の活動力は、すべて、人びとが共生しているという事実によって条件づけられている。（p.４３）そもそも、人間生活（活動力）は直接的・間接的に関わらず他人と共有する空間によって条件づけられその存在を維持できる。

①公的領域

「公的（パブリック）」は二つの意味をもつ。

＊「公に現れるものはすべて、万人によって見られ、聞かれ、可能な限り最も広く公示される」→活動によってその主体が暴露されその領域に存在する人間全てに触知される。

＊人間が私的に所有している場所とは異なる場所であり世界そのものである。世界とは「人間の工作物や人間の手が作った制作物に結びついており、さらに、この人工的な世界に共生している人びとの間で進行する事象に結びついている。(p.78)」

→人々を結び付けると同時に分離させている介在者（イン・ビトゥィーン）であり、公共空間は触知できるものである。例えば人々の真ん中にあるテーブルみたいな物。

②私的領域

私的領域は他人の存在（公的領域の多数生）が「欠如（privatiive）している」状態を指す。→他人からの見聞きから生じるリアリティ、物の共通世界の介在による他人との「客観性」、生命そのものよりも永続的なものを達成する可能性が「奪われ（deprived）ている」状態。

→古代ヨーロッパにおいては財産つまり私的富によってその所有者が自分で使用手段と消費手段を得る仕事に携わる必要がなくなり、公的活動力の自由が確実に保障された。これは、必要から解き放たれ、公共領域に加わる条件となった。(p.93)

③社会的領域

近代社会が勃興し、「活動力」内部のヒエラルキーにおいて私的領域を支配する労働が仕事よりも上位に置かれるようになり、労働と仕事の境界が曖昧になった。『「社会」では自分が他人と異なる卓越を示す「活動」に代わって自分が他人と同じである事を示す「行動（ビヘイビア）」が人間を規制する。

HSF 事務局長 佐野英志 headquarters@hsf.jp

＊公的領域と私的領域の変遷

①ギリシア時代：家庭（oikia）と共同体（koinon）の分離

奴隷という労働手段によって生物的生命の必要の充足から解き放たれたポリス市民は活動を通じて政治的組織をつくり上げた[2]。→「ポリスの創設に先立って部族や種族のような血縁にもとづいて組織された単位が、ことごとく解体した（p.44～45）」。

⇓

古代ヨーロッパでは「**私的領域と公的領域の間の区別は、家族の領域と政治的領域の区別に対応しており**、少なくとも古代都市国家の勃興以来、異なった別の実態として存在してきた。（p.49）」

②社会領域の出現：国民と集団的家計（コレクティヴ・ハウスキーピング）

古代の社会思想において、「経済的」なのも、すなわち個体の生命と種の生存に係るものはすべて、定義上、非政治的な家族問題であった（p.50）。

⇓

「社会が勃興し、「家族（オイキア）」あるいは経済行動が公的領域に侵入してくるとともに、家計と、かつては家族の私的領域に関連していたすべての問題が「集団的」関心となった。（p.50）」

③社会的なるもの

公的生活は生命の「必要」が充足されることで可能になる。その手段が奴隷の所有であった。近代になりそれは自身の「労働力」へと変わっていった（p99）。

⇓

この結果、私的領域の拡大が起き社会領域と呼ばれる領域が勃興し、公共領域は私的なるものの保護をするために私的領域の機能になり両領域の際は消滅した。

---

[2] ギリシア人の理解において、ポリスつまり公共領域は 言（レクシス） 論 を通じた説得によって他者に働きかける活動によって条件付けられている。これとは正反対に、家父長制度や血縁と言った社会制度は他者に「命令」することでその単位や制度を条件付けてきた。これはポリスの外部世界で、特に専制国家などで観られる現象であり、人間が単に種の保存（この場合血縁の保存）という「必要」に重複させられている状態として、野蛮な社会だと認識されてきた。ギリシアの哲学者達は「自由はもっぱら政治的領域に位置し、必然は何よりもまず前政治的現象であって私的な家族組織に特徴的なもの（p.59）」と考えていた。

HSF 事務局長 佐野英志 headquarters@hsf.jp

第３章　労働（労働する動物）

労働は必然（生存の必要[3]）を充足する活動力であり、生み出すものは触知できるもので最も脆弱な物であり時間的耐久性が最も低い。

＊労働とは「労働するために食べ、食べるために労働しなければならない（p.２３３）」という固有の強制的な反復に他ならない。

⇓

貨幣の登場と産業革命による労働力の商品化によって労働が生み出すものが「人が損傷することなく持ちうる永続的な物」に変容した。またこれに伴う近代社会の勃興によって活動力内のヒエラルキー構造において労働が仕事に上位する様になった。

⇓

産業革命はすべての仕事を労働に置き換えた（p186）。この結果、消費するための物を生産するという大衆社会になり、消費と生産の自転車操業が社会の至上命題になった[4]。

第４章 仕事（工作人）

＜工作人＞は、製作者以外の何者でもなく、ただ仕事の活動力から直接生じる手段と目的の観点だけから思考する（p.247）。

＊仕事は「労働するために食べ、逆に食べるために労働しなければならぬという、労働に固有の強制的な反復とは違う（p.２３２）」

＊活動との違いは「製作過程は不可逆的ではないという点（p.233）」である。

⇓

仕事の人格化である工作人は交換市場[5]という公共領域において、自分の生産物と他人の背産物と交換することによってのみ、自分にふさわしい他人との関係を見いだす事が出来る（p.255）。この市場上の交換によって、社会に価値[6]が生み出される。

⇓

大衆社会の勃興によって労働が仕事に優位することになり、その結果、仕事によって生み出されてきた「世界」が消費の対象となった。

---

[3] マルクスは労働を「人間による自然との新陳代謝」と定義した（p154）。

[4] アレントは余暇という観点より、この大衆社会を観察している。余暇は本来労働の外にあるものであったが、大衆社会においては本質的には「消費能力を完全に維持するために、いかにして日々の消耗に十分な機会を与えるかと言う問題に他ならない（p193）。」

[5] アダム･スミスによれば、人間を動物から区別するものは、「ある一つのものを別のものと取引し、取り換え、交換する傾向」である（p255）。

[6] 価値とは、物が私的領域においてはけして所有することはできないが、それが公的に現れる瞬間には自動的に獲得されるものである（p.260）。

HSF 事務局長 佐野英志 headquarters@hsf.jp

第５章　活動（活動の人）

活動はその人が「なに（What）」であり「だれ（Who）」であるかを暴露する行為でもある。

＊活動は言論と言う人間固有の機能と結びついている。言論または活動なき生活は世界からみれば死んでいる（p.287）。
*ドラマが完全に生命を与えられるのは、やはり、それが劇場で演じられるときである（p.304）。→演劇は優れて政治的な芸術である。

⇓

言語によるアイデンティティの伝達、who[7]・what の暴露の主体は人間だけという点で政治と同じ構造である。

＊活動の２つの特徴とその解決

①活動結果の「不可予言性（アンプリディクタビリティ）」

活動の結果として語られる物語の内容がどの様な物であろうと、またそれが、私的生活で演じられようと、公的生活で演じられようと、さらにそこに関係する活動者が多数であろうと少数であろうと、いずれの場合をとってみても、活動の意味が完全に明らかになるのは、ようやくその活動が終わってからだということである。
→**約束こそが救済方法である。**

②活動過程の「不可逆性」
人間が自分の行っていることことを知らず、知る事も出来なかったにもかかわらず、自分が行ってしまった事を元に戻す事ができないということ（p.371）
→**許しの能力だけが救済方法である（対局にあるのは復讐である）。**

⇓

約束と許しという二つの能力は、共に多数性に依存し、他人の存在と活動に依存している。

---

7 「人間の　本質（エッセンス）」ともいいかえられる（p.321）。

2013 年 8 月 2 日（金）
第 3 回「人間の安全保障」読書会 於 東京大学駒場キャンパス
HSF 事務局長 佐野英志 headquarters@hsf.jp

第６章　＜活動的生活＞と近代

重大で危険な兆候がある。それは、人間がダーウィン以来、自分たちの祖先だと想像しているような動物種に自ら進んで退化しようとし、そして実際にそうなりかかっている（p.500）。

＊近代の３つの入り口によって世界疎外が起きた。
①アメリカ大陸の発見とそれに続く地球全体の探検。
②宗教改革による財産の個人的収用と社会的富の蓄積。
③望遠鏡の発明と地球の自然を宇宙の視点からの考察の発展。

⇓

数、シンボル、モデルを用いて、地球の物理的な距離を、人間の肉体的が自然に感覚でき、理解できるサイズにまで地球を縮小した。この縮小は人間を地球の直接的な環境から遠ざけ（エリアネイト）ることになった。また、土地収用に始まる富の蓄積過程は世界と人間の世界性[8]を犠牲にして成り立っている。 この世界疎外が近代社会の進路と発展を決定づけた。

＊キリスト教による生命の神聖化
キリスト教はその教義にて人間の生命を最高善とした。この結果、労働、仕事、活動がその最高善のもとに均質化される傾向が強くなった。言い換えれば、古代ヨーロッパ世界が持ち合わせていた軽蔑から労働の活動力が開放された。しかし、キリスト教自体が積極的な労働哲学を発展させたわけではなかった。

⇓

つまり、近代ではキリスト教の発展、貨幣経済の勃興、資本主義の確立によって活動的生活のヒエラルキーの中で＜労働する動物＞が勝利を収め、工作人に上位し、労働こそが人間能力の最高位に昇格することになった。これが大衆社会である。

⇓

現代（社会）は労働社会の最終段階である賃仕事人の社会はそのメンバーに純粋に自動的な機能の働きを要求する。それはあたかも個体の生命が本当に種の総合的な生命過程の中に浸されたかのようであり、個体が自分から積極的に決定しなければならないのは個別性—まだ個体として感じる生きることの苦痛や困難—をいわば放棄するということだけであり、行動の幻惑され「鎮静された」機能的タイプに黙従することだけであるかのようである（p.500）。

---

[8] **土地を含む財産は人間の世界性にとって最も基本的な政治条件である。**